文部省選定
日本産業映画・ビデオ賞
教育映画祭優秀作品賞

●企画　大成建設株式会社
●製作　株式会社桜映画社

木組の技

萬満寺本堂建立

記録映画・カラー32分
■価格／16ミリ 210、000円

すいせんの言葉

「祈りの木組み」
東京大学名誉教授　村松貞次郎

松の巨木を挽く。体重のすべてをかけるすさまじい仕事だ。溢れ出る大鋸屑。チョーナの業。荒削り仕上げ削り。カンナの音はあきらかに違う。ヒノキを彫る。むせかえるような木の香が画面に流れる。手品のように銅板を切り、叩き、そして葺く屋根職。至難の業という板支輪や格天井をピタリと納める木組みの技。ノミが掘り、ノコが挽く。

はげしい息づかい、きびしい眼。モノと道具と人の、これはうらやましいほどの陶酔の姿である。それは造る人の祈りの姿でもある。祈りがあってこそ寺の建築は仏に捧げられる。木組みは合掌の心組みともなる。

これは伝統の匠（たくみ）の技を「萬満寺本堂」建立の経緯を追って活写した貴重な映画である。木組みの技の先に木霊（こだま）の妖しさまでも映している。

配　給

あらすじ

千葉県松戸市、馬橋駅にほど近く、臨済宗法王山萬満寺がある。古い山門には、国宝の仁王尊があり、この金剛力士像の股くぐりをすると、中気除けになると信じられ、人々に親しまれている。

この萬満寺で、本堂消失以来90年ぶりに新本堂が建立されることになった。新本堂は、総檜造り、宇治の平等院風の様式による本格木造建築で、宮大工をはじめとする工匠たちが伝統の「技と巧み」を競い合う。

現場に運びこまれた化粧材の檜は、まず、自然な反りが収るまでじっくり寝かされる。その間に大きな屋根を支える小屋組材の準備が進められた。木挽き職人が昔ながらの大鋸（おが）で太い丸太を縦切りにする。寺院建築特有の緩やかな反りを見せる大きな虹梁（こうりょう）には、木彫家により古典的な彫刻が施される。

宮大工たちは、柱や梁の接合部となる、複雑な形の仕口造りに力を傾ける。軸組（柱や梁、桁で構成する中心的構造部）、そして屋根下となる小屋組へと順次、建方が進む。軒下に整然と並ぶ垂木（たるき）の取付け、その上に深い軒の出をテコの原理で支える太い桔木（はねぎ）の組立が続く。古式に則った盛大な上棟式の後、屋根には銅板が葺かれる。小割りの銅板を美しく組合せて柔らかな感じをだす。

そして、九十畳敷の大広間となる本堂外陣では、大天井に珍しい様式の「折上げ格天井」が造られる。天井周辺部から立上る「支輪」に続いて、大きな格子を組む。この格天井は中央部を少しなだらかに持上げる。これを「むくり」と言い、広い大天井が平に見えるのである。こうして〝木組の技〟の粋をこらした見事な折上げ格天井が形を整えた。

3年の歳月と台湾檜1500石を費やした本堂には、工匠たちの「技と心」が深く刻みこまれて、昭和62年5月遂に完成したのである。

■製作意図

わが国の観光地や名所旧跡には必ずといってよいほど古い寺院建築があるが、数百年の歳月にも耐える木造建築はどのようにして造られているのか、その建立過程や技術の細部を直接見ることは、容易ではない。そこには長い歴史と修練された職人技術が深く秘められているのである。

わが国が世界に誇り得る伝統的な技術の一つ、宮大工（神社仏閣などの建築を専門とする大工）による木造寺院建築は、近年、木材入手難、職人不足などから、その事例は極めて稀なこととなっている。新しい寺院は、耐火上や経済上の理由からコンクリートで造られる例が多い。

しかし、わが国本来の伝統の美に対する見直しや経済力の向上から、なお木造建築の例はあり、宮大工の「技」をみることができる。そこで、映画により、宮大工たちの細かな仕事振りを捉えることで、木組の精巧さや繊細な感覚に満ちた美しさを伝え、わが国の伝統の重み、寺院建築、特に職人技術に対する理解を促進する目的で企画された作品である。

この映画には、宮大工だけでなく、珍しい「木挽（こび）き職人」や古典的彫刻を施す木彫家、屋根葺きに活躍する銅板工らの手技を収めている。

萬満寺本堂建立

木組の技

●スタッフ●

製作	村山 英世	音楽	長沢 勝俊
監督	堤 哲朗	効果	福島 幸雄
脚本	堤 哲朗	解説	鈴木 瑞穂
撮影	堤 哲朗	録音	福島音響
	山屋 恵司	整理	加納 宗子
照明	水村 富雄	現像	IMAGICA

■製作＝株式会社桜映画社　〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル　TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666